

遠隔学習課程〈自己表現作文コース〉 —中国帰国者としての体験を日本語で表現し、伝える—

馬場 尚子

- I. はじめに
- II. 帰国者の自己表現への欲求
- III. 本コースの対象となる帰国者像と作文テーマ
- IV. 本コースのねらいと特徴
- V. コースプログラム (教材の構成)
- VI. 本コースの添削者に求められる役割
- VII. 受講者の作文例から
- VIII. 今後の課題
- IX. おわりに

I. はじめに

中国帰国者とその家族（以下、帰国者）は、残留邦人（または、その家族）としての中国での体験、また、帰国後の生活体験から伝えたい多くのこと、また私たち受け入れ側の日本人が聞くべき多くのことを持っている。しかし、実際に本人達の口から日本語で「伝える」という行為は、なかなか難しい場合が多く、語られるべきことは、そのままそれぞれの胸の内にはしまわれていることも多い。そこには、日本語力の問題、文章にまとめるという経験の問題、語り手である帰国者自身の心理的な問題など様々な要因が係わっていると考えられる。

そのような帰国者が、自己表現することの糸口となるように作られたのが「遠隔学習課程(通信教育)」の〈自己表現作文コース〉である。ここで言う「自己表現」とは、自らの体験や人生について自分の言葉で言い表すことを言う。本コースは 2008 年 3 月に開講し、その後、2009 年 4 月に〈自己表現作文コース (1)「日本語学習」A〉と〈自己表現作文コース (1)「日本語学習」B〉となった。開講から 2 年たち約 200 名が

本コースを受講（現在受講中の者含む）した。

本稿では、このコースを開設した背景、対象となる帰国者像、作文完成のプロセスなどを紹介し、実際の受講者の作文を通して、本コースのねらいは実現されているか等考えたい。

II. 帰国者の自己表現への欲求

まず、帰国者が自己表現したいと思う背景には何があるのだろうか。もちろん、日本語力を付けたいという目的は皆持っているが、ここでは、あえてそれ以外の目的を考えてみたい。自己表現への欲求は、帰国者としての立場や属性によっても違いがあると思うが、以下のようなものが考えられるのではないかと。

1. 「日本人」としてのアイデンティティーの確認

帰国者一世には終戦当時 13 歳未満とされる残留孤児と 13 歳以上だった残留婦人がいるが、とりわけ幼少期に日本語を話していた一世本人にとっては、日本語は‘失われた母語’であり、帰国後の彼らの日本語学習は失われた母語を回復するという過程でもある。したがって、日本語で自己表現できることが「日本人」としてのアイデンティティーを確認することであると意識する一世も多い。

2. 歴史の証言者となるため

帰国者一世本人が残留邦人となった経緯や、その後の中国での生活、そして帰国の経緯は、戦後世代、或いは、日本で終戦を迎えた人々には想像しがたいだろう。特に一世世代の多くは、二度と自分たちと同じような思いをさせたくない、二度と人の命や人生を奪う戦争を繰り返してはならない等の思いが強い。自分たちの残された時間の中で帰国者としての体験を語っておきたい、伝えておきたいという思いを強く持ち続けている。

3. 心理的ストレス（トラウマ）からの解放

残留邦人は、戦争終結直後の逃避行や家族との生き別れ、死に別れ等、

壮絶な体験をしている場合が多い。この記憶について、帰国者は自分の家族にも語れないでいることもめずらしくない。それほどこの体験は一世本人にとっては深い心の傷になっている。その体験を人に伝え、表現することにより、未だ生々しい体験を過去のものとして意識できるようになり、距離を持って見ることができるようになるのではないか。帰国者本人世代は意識、無意識のうちにこのような心理的プロセスを求めていると思われる。

4. 人生の総括への欲求

残留孤児、婦人世代は、年齢的にも60代～80代となり、人生の終盤期に近づいている。自分自身の過去を振り返り、人生を見つめ直し、自分の足跡を残しておきたい、まとめたいと思う時期でもある。その表現形式の1つとして「自分史」を書くこと、記録することへの欲求を持つ者も多い。

5. 自己表現に対する不全感からの解放

残留婦人世代を除く帰国者のほとんどは中国語が第一言語であり、日本語は第二言語として学ばれる。それぞれが持っている文化習慣は中国のものである。孤児世代の帰国時年齢はおよそ40～60代、二世世代も10～40代、婦人の二世であれば50～60代も多い。40代以上で日本語学習を開始してもなかなか思うような日本語力を身に付けることは難しい。中国では「社会人」として自由にできていたこと、発言できていたことも帰国後は難しくなり、その不自由さからストレスもかなり高まる。こうして、帰国者の多くは、社会人としての不全感を持ち続けることになる。自己表現することにより、このような不全感から少しでも解放されたいという基本的な欲求があると思われる。

6. 日本社会の中での自己確認

中国帰国者とその家族は、「日本人」として帰国しているにもかかわらず、日本社会の中では文化的マイノリティーとして見られ、差別や偏見に遭うこともある。自尊感情を傷つけられることもあるだろう。マジョ

リティーとしての日本人社会に対して対等な立場で自分の意見や考えを発信する機会を持ちたい、受け入れられたいとの思いは、本質的な欲求としてあるだろう。

以上のような自己表現に対する欲求が、帰国者が「書く」ということの背景にはあると考える。本コースを受講することでこうした欲求の一部なりとも満たされればと思う。そして、自分自身について「書く」「発信する」きっかけとなればと願う。

Ⅲ. 本コースの対象となる帰国者像と作文テーマ

帰国者といっても一括りにはできない多様性があり、本コースの受講者が、残留邦人本人であるか、その配偶者であるか、または、一世世代か二三世代かによっても書ける内容、書きたい内容は変わってくるだろう。また、帰国後の経験などによっても書けることは変わってくるだろう。そこでまず、帰国者の属性を俯瞰し、来日後の経験などを想定することによって対象者像全般をイメージした。そして、必要条件としての日本語能力の水準を設定し、作文のテーマを以下のように決めた。

1. 書き手の属性と生活経験等

a. 一世世代本人 現在 60代以上

文化、アイデンティティーの背景：中国／日本

一世世代配偶者 文化、アイデンティティーの背景：中国

- ・帰国後 3,4 年以上から 10 年程度を想定。日本の生活には一応慣れており、日常生活で使う日本語には不自由しない。初級程度の日本語学習経験はあるが、完全に使えるところまではいっていない。帰国時年齢が 50 歳程度以上で、高年齢で日本語学習を開始した者。

b. 二三世代本人 20代～50代（婦人二世は 60代有）

文化、アイデンティティーの背景：中国（完全に中国と言い切れない場合もあるかと思う）

二三世代配偶者 20代～50代

文化、アイデンティティーの背景：中国

- ・帰国後2、3年程度は経過しており、入門レベルの学習経験はある。仕事経験も多少あり、日常会話は不自由しない。

2. 条件とする日本語力等

- ・日本語レベル：初級中盤以上（遠隔課程「続入門日本語文法文型コースA」修了程度 ※基本的な動詞活用形、名詞修飾、敬語など既習）
- ・その他：中国で中卒程度の中国語での読み書き能力があること

3. 作文のテーマ

本コースのテーマは、帰国者が自己表現したいと思う内容であり、経験として持っていることでなければならない。書きたいという動機を持ってないテーマであれば、Iで述べた自己表現の欲求を満たすことはできないだろう。そのような意味で、作文のテーマ選びは重要である。書きたい内容は世代によっても微妙に違ってくることが考えられるので、テーマ決定の手順として、世代に応じた、或いは世代共通のテーマとして考えられるものを以下のように挙げてみた。

一世世代	1. 養父母のこと
	2. 帰国への決意
	3. 終戦からの逃避行
	4. 日本人として中国社会で生きたこと
二三世代	1. 日本の学校体験
	2. 子供の教育
	3. 資格と仕事
世代共通	1. 日本語学習
	2. 日本での仕事
	3. 日本の印象
	4. 日本での異文化体験
	5. 日本の近所づきあい

	6. 帰国直後の生活
	7. 中国の故郷
	8. 中国での仕事
	9. 中国での生活
	10. 将来の希望、夢
	11. 私の趣味
	12. 私の家族
	13. 中国料理

以上からテーマを選ぶことにしたが、まずはシリーズ（1）として一世世代、二三世代ともに経験している「日本語学習」を大テーマとして取り上げ、大テーマを構成する小テーマとして「日本語学習の方法」「日本語学習上の困難」「中国語と日本語の比較」「日本語学習歴」「日本語学習上のエピソード」「日本語学習の目標」を設定した。現在作成中のシリーズ（2）としては、「日本での生活」を大テーマに選び、小テーマとして「帰国の動機」「帰国直後の日本の印象」「帰国直後の生活」「現在の生活」「中国の家族」等を取り上げる予定にしている。

IV. 本コースのねらいと特徴

1. 「語り」文を作文する

自分の経験や考えを書き表すに際しては、様々なスタイルが可能だが、本コースでは、書き言葉のスタイルではなく、基本的には、そのままその文章を声に出して読めば一種のスピーチになるような「語り」、または「口頭発表」のための原稿を書くこととする。そのため、この教材の日本語文は、原則として、新聞記事や論説等の文体のような「だ・である」体ではなく、「です・ます」体を用いる。最後には簡単なスピーチ原稿ができあがることになるが、これはまたこのテーマに関連した話題の会話でも活用できることをねらった。

2. 基礎学習の復習、補強ができる

本コースで書く作文は、初級の基本的な文法事項の範囲内で、できる

だけ平易な表現を用いて文章を書くことを目指すが、受講者は、日本語の文法や表記法、語彙などについての基礎的学習が済んでいることを前提とする。この教材を使って系統だった文法や基礎的語彙、文字などを学習するものではない。

しかし、基礎学習が済んだ者であれば、作文のテーマを表現するのに必要な文法事項や語彙表現などの復習や補充ができる。また、学習した語彙表現の運用の仕方や、場面に応じた適切な表現力を身につけることができる。

3. 教材は受講者が書きたい内容の素材集となる

本コースで使用する教材は、帰国者が共通に経験してきたであろう事柄からテーマを選び作られている。シリーズ（1）の「日本語学習」では、この大テーマを設定し、その大テーマを更に6つの小テーマに分けた。それぞれの小テーマにはモデル作文が4例ずつあり、これは、それぞれの世代、立場に合わせた内容になっている。受講者はこのモデル作文、その後続く文型練習、語彙集などの学習を通して、自分が共感、同感する部分を見つけ出し、自分自身の作文の素材を得られるようになっている。模倣できる部分は模倣し、参考にできる部分は参考にして、日本語による文章を書くことの敷居を低くしながら、自分の言いたいことをまとめる作業が進められることを目指す。

V. コースプログラム（教材の構成）

次に、作文の作成プロセスを見る。本コースは通信教育という方法をとるので基本的には自学自習で進められ、数回のセンター講師の添削を受けて作文を完成させなければならない。帰国者の中には、中国でも文章表現の機会があまりなかった者も多くいることも想定しながら、学習課題を明確に具体的に示していく必要がある。また、本来、作文は自由度の高い創作的な成果物を期待するものではあるが、多数の受講者を対象にするコースとしては、添削指導上の効率も考えなければならない。したがって、ある程度の作文上のルールや、完成物の共通イメージを持

てるような仕組みをプログラム内に取り入れた。プログラムは以下の5段階のステップを踏んで作文を完成させるようになっている。

1. 作文の5段階ステップと教材の構成（目次）

ステップ1：★作文のイメージを作ろう

- ①モデル作文を読んでみよう
- ②作文を構成する小テーマについて考えよう
- ③次のステップに進む前に

ステップ2：★自分のことについて書いてみよう

- ①「日本語学習の方法」
- ②「日本語学習上の困難」
- ③「中国語と日本語の比較」

ステップ3：★作文をまとめあげよう

- ①文章の構成とポイント
- ②自分の作文の構成を考えよう
- ③構成案に従ってまとまり毎に文章を書いてみよう

ステップ4：★推敲し、完成させよう

- ①推敲
 - (1) 文体について
 - (2) 推敲のポイント
 - (3) 接続の表現について
- ②清書
 - (1) 表記について
 - (2) タイトルについて

ステップ5：★話してみよう：スピーチする場合の留意点

2. 各ステップの詳細と学習の流れ

本コースは、あまり文章を書き慣れない帰国者も想定に入れ、なおかつ、対面指導ではなく通信教育であるという特徴から、その作文のプロセスをなるべく丁寧な、スモールステップで進むように配慮した。文章の筋立て（起承転結等）も、質問の回答を作るという形である程度できあがっていくようにし、各内容がテーマから大きく外れないように留意

した。以下に各ステップの詳細と学習の流れについて紹介する。

ステップ	ステップの詳細と学習の流れ
ステップ1 ★作文のイメージを作る	最終的に完成させる作文のモデル文を読み、以下のポイントを確認しつつ自分がこれから書く作文のイメージを作る。 ①どんな内容を書くのか ②作文としてのまとめ具合はどうか ③文の長さ、作文の全体量 ④使用される日本語の難易度 ⑤文章の構成（書き出し、小テーマ、まとめ等）
ステップ2 ★自分のことについて書く	3つの小テーマについて短い作文を書く。それぞれは以下のようにして仕上げる。 ①Aさん、Bさん、Cさんのモデル作文（1,2段落程度）を読む（中国語訳付き） ②モデル作文の中に出てきた主な文型を抜き出し、代入練習をする（代入語彙は小テーマの話題に関するもの） ③小テーマの内容の骨子を作る質問（4問程度）に答える形で、Aさん、Bさん、Cさんのモデル作文の中から該当部分を抜き出し中国語和訳する。①のモデル作文には出てこないDさんの回答を登場させ、回答のバリエーションを増やす。最後に自分の回答も書く。 ④Dさんの回答をまとめて作った小テーマ作文を読む。回答をまとめればある程度小さい作文ができあがること、回答をただ並べるだけでは、まとまった文章にならないことも意識する。 ⑤また、質問に対する自分の回答をまとめて、小テーマの作文を完成させる。 課題としてセンターに提出
ステップ3 ★作文をまとめる	ステップ2でできあがった3つの自分の小テーマ作文を、どのように組み合わせるかを考え、付加する部分、削除する部分、書き始めやまとめの部分など全

	体の統一感を意識しながら構成案を練る。そして、実際に文章を並べてみる。 課題提出
ステップ4 ★推敲し、完成する	ステップ3で1つにまとめた文章を、返却された添削を参考に更に訂正、推敲して書き直す。 課題提出 再度添削された内容に沿って、清書する。 課題提出 ※推敲のポイント。 文体が統一されているか／主題・構成がしっかりしているか／内容・文体にふさわしい表現や語彙になっているか／文法・表記・接続表現とその使い方に間違いはないか／タイトルの付け方は適切か
ステップ5 ★スピーチする	完成した作文を、スピーチする場合の留意点（声の大きさ／スピード／発音／表情／動作等々）を意識しながら、声に出して練習する

VI. 本コースの添削者に求められる役割

本コースはステップ2の段階で3回、ステップ3で1回、ステップ4で2回の計6回の課題提出と添削で作文を完成させることを原則としている。この6回のやり取りは原則として一人の担当者が最後まで行う。添削担当者（以下、添削者）は、文章の校正や文章表現指導、内容に対するコメントなどを行うが、「遠隔学習課程」の他コースの添削者とは若干違う構えも必要となる。それは、日本語での文章表現の的確さを高めながら、受講者が自己表現できたという達成感を持てるようにサポートしていくことである。そのために、添削者には、受講者自身の体験や考え方に共感する姿勢が求められる。以下、本コースの添削者に必要となる役割と姿勢について見てみる。

1. 伝えたいことが伝わる日本語にするための修正（本人の個性を壊さない添削）

添削者は、まず、受講者の作文の中国語部分を見て述べたいことを確

認しながら、それが読者に伝わる日本語になっているかを見る。文法や表記上の間違いはないか、語彙や文型は的確に使われているか、文の呼応関係が崩れていないか、時制が適切か、文と文は本人の意図しているように繋がっているか、日本語としてあまりに不自然な言い回しはないか、全体の構成は自然な流れになっているか、等々の観点で添削する。

中国文化を背景に持つ帰国者の多くは、漢語文化圏の作文作法を身につけており、独特の文体がある。このことについては、全てを否定してしまうと本人らしさや言いたいことの本質が伝わらない場合もあるだろう。従って、多少不自然に感じられる部分についても、現在の受講者らしさを表す自己表現であると、尊重することも必要である。中国的な表現、言い回しも含め、本人の個性を消し去らないような添削を意識する必要がある。

2. 段階的な添削と本人の日本語力のレベルにあった日本語表現

6回行われる添削のうち、当然初めほど直す部分は多くなるが、最初に全てを直し切らなくともよい。あまりに訂正箇所が多すぎると、見にくいだけでなく、受講者の「書くこと」への意欲喪失にもつながるので、多少不自然な表現を残していても理解可能であれば、次につなげることを優先する。

また、作文の中には、辞書の引き写しで、本人本来の日本語力を遙かに超えた表現を使おうとしてかえって意味が伝わりにくくなっていたりする場合もある。何とか意味は理解できたとしても、前後の表現とアンバランスである場合もある。このような表現は避けさせ、なるべく自分が持っている日本語力を利用して言いたいことが伝わるように指導する。添削する場合も受講者の本来持つ日本語力をベースとし、添削者の作文になりきってしまわないよう注意する。

3. 受講者の自己表現を促進する励まし、アドバイスを行う

添削者は添削する作文の中に、或いは返却時に添付する送付状の中に、受講者向けにコメントを記すことになる。コメントには、添削のポイント

ト説明の他に、学習者のタイプや作文の仕上がり具合を見ながら、肯定的な評価中心に、問題点（改善点）の指摘もする。重要なのは、自分が書いたことに対しての達成感を感じてもらうようにコメントすることと、次を書こうとする意欲を持つように行うということである。

4. 受講者が表現した内容に興味を持ち、受容し、共感する

個々の作文には似通った点もあるかもしれないが、完全に同じものはないはずである。それぞれの体験はそれぞれの現実であり、少なくとも受講者は自分自身の固有の体験としてそれを語っているのである。「日本語学習」というテーマ1つとっても、定着地での学習環境、生活環境、日本語レディネス、年齢、立場等々によって日本語学習への思いや学習の過程は違ってくるだろう。添削者はそれぞれの日本語学習過程に思いを馳せ、それぞれを追体験しつつ、文面に表れる、或いはその背景にある辛さや喜びに共感する態度が必要である。成人学習者、特に一世世代を中心とした高齢者の日本語学習は思うように進まず、完全習得は望めないというのが実態だろう。しかし、本コース受講者の多くは、そのようなハンディにもめげず相当な努力と忍耐で学習を続けている。これらの受講者の日本語学習に興味を持ち、伴走していく姿勢が添削者には必要である。

5. 「中国帰国者」について知る

受講者の作文の中には、中国残留邦人となりどのような経緯で母語（日本語）を失ったか、いかにその失われた日本語を回復したいという思いが強いか書かれていることも多い。失ってしまったものに対する無念さとともに、日本語学習を日本人として再び認められるための、唯一無二の手段と信じ学習に打ち込む姿も見受けられる。読み手でもある添削者は、受講者の作文から一人一人の中国帰国者としての歴史や思いを聞き取ることもなる。また、配偶者や二三世も家族が日本人であるということにより、特別な人生を送っていると言える。「中国帰国者」の実態は、帰国者一人一人の体験や思いから学ぶところが大きい。彼らの作文

に関わるということは、とりもなおさず、「帰国者」について「知る」ということである。この「知る」ということが帰国者の自己表現を受け止める第一歩である。添削者は、添削する者という役割以前に、一日本人として「帰国者」について学ぶ姿勢が必要である。

VII. 受講者の作文例から

本コースを開講してから現在まで、作文を完成させた修了者は約 40 名である。修了者の作文から本コースのプログラムや、教材のモデル作文が、こちらの意図したように受講者に利用されているか、ステップがうまく機能しているかを今後検証していかねばならない。

受講者の居住地で行われているスクーリング（※「スクーリング」については本紀要「‘いつでもどこでも始められる’ 帰国者のための『遠隔学習課程（通信教育）』」参照）の講師から、学習活動の様子などが報告されてくるが、以下のような記述がある。

- ・推敲する前にもう一度、モデル作文で内容、表記などを確認
- ・モデル作文の自分に似ているところに印を付ける
- ・「難しそうだが、自分の言いたかったことと同じ」（という受講者の反応があった）
- ・自分が言いたいことと同様の表現があれば、線を引いてマークする

このように、教材のモデル作文を自分の作文の素材として利用しようとしている様子うかがえる。学習者からも「自分の言いたかったことと同じ」という反応があったことも記されているが、これこそ本コースがねらったことの1つである。また、自分のことを書き始める前に、スクーリングの場で「教師と語り合って口頭でやり取りしてから書き始める」や「小作文の内容を講師が日本語でインタビューしながら導き出していたので、会話のよい練習になる」等の記述もあり、ステップ2の③の自分の作文を作るためのQAの活動が、「書くこと」を取り組みやすくしているのではないかと思われる例もあった。

それでは、どのように受講者が教科書のモデル作文から素材となる部

分を選び出し、自分の作文に引用しているのかを実際の修了者の作文から見てみる。

〈Yさん（一世配偶者 来日 14 年 66 歳）の作文：「石を穿つ水滴、私の日本語学習」〉

※下線部はモデル作文から引用されている部分

「光陰矢の如し」ということばがあります。日本に来てからもう 13 年になります。長いようであつという間の月日でした。日本の大地を踏んだ時から日本語学習が始まりました。最初は「こんにちは」さえ、話せなかった私も今では何とか日本語で日常生活が送れるようになりました。そして、今も私は日本語学習を続けています。

帰国してすぐ仕事を探して、会社で仕事を始めました。朝、5時に起きて昼間働きながら夜自動車学校に通って運転を勉強しました。いつも10時に家に帰りました。この頃、日本語を勉強する時間がありませんでしたので、今も日本語の発音が悪いです。発音の他に戸惑ったのは「漢字」です。私は、日本語の勉強を始めたばかりの頃、日本と中国で使われている漢字は全く同じなので、日本の漢字を見れば意味は簡単にわかると思っていました。しかし、日常生活の中で中国と同じ漢字でも日本の漢字の意味は中国と違うものがあるということがわかりました。

今、年をとり記憶力の衰えは著しいです。勉強しても覚えていません。だから、日本人と交流することができません。日本語を学ぶことは大変なことですが、適切な学習方法で学んでいればよい結果が得られると思います。私は 66 歳です。記憶力は日に日に衰えています。勉強しても覚えていません。だから、私は「繰り返し」と「実際に使ってみる」ということを心がけて勉強しています。新しい単語は 5 回以上読んで、3 回以上書いて、CD を 5 回以上聞くようにしています。繰り返し勉強すると印象に残り忘れにくくなります。また、パソコンは平仮名を正確に入力しないと正しく漢字に変換してくれないので、細かいところに注意するようになる良い学習方法だと思います。また、時々聞き取れず、理解

できないことがあります。そんな時、カードリングにわからないことを書いて、後で辞書を引き勉強してすぐ覚えるようにしています。今私の日本語は少しずつ上達しています。

学習をするのに年をとりすぎたと言うことはありません。いくら年をとっても学ぶべきものはあります。私は 66 歳になりましたが、やはり、日本語を勉強することを続けたいと思います。「郷に入っては郷に従え」日本で長く生活するために日本語や日本文化、日本の習慣を勉強しなければなりません。日本語を学ぶことは、大変なことですが、周囲の人たちともっと楽に交流できれば、生活が楽しくなると思います。ですから、今は日本語でもう少しスムーズにコミュニケーションできるようになることが目標です。

困難はスプリングです。私が強い努力でスプリングを押せば困難は縮んで小さくなります。悲しんでも仕方ありません。自分で自分を励まし、困難を乗り越えています。そして勇気と自信を持てたときに、困難を克服した気持ちになりました。「水滴りて、石を穿つ」私は水滴と同じことをしています。ゆっくり焦らず勉強していこうと思います。

以上の作文は、モデル作文からかなり引用している例である。引用は語彙レベル、慣用表現レベル、文レベルなど様々である。もちろん、全く引用のないオリジナルな表現で作文を書いてくるケースもあるが、よく引用されるフレーズもある。例えば、「昨日勉強したことを次の日にはほとんど忘れてしまいます」「年をとり記憶力は日に日に衰えています」「長いようで、あっという間の月日でした」「自分で自分を励ましました」「悲しんでも仕方ありません」「日本は異文化の地であり、日本語は幼い頃から自然に身につけた言葉ではないということです」「繰り返し勉強すると印象に残り忘れにくくなるからです」「仕事や家事を終えた後の限られた時間の中で日本語を勉強しなければなりません」「～年の学習を思い出すと感慨無量です」「何度も何度も日本語のテープを聞き、何度も何度も教科書の単語や例文を書き写し、教科書の会話や例文を丸暗記しました」「ちんぷんかんぷん」「気ばかりが焦り」などは比較的によく引用され

る。

以上から、教科書のモデル作文が、受講者の作文の素材となり得ていると言っているのではないかと思う。本コースのモデル作文は、いかに帰国者が言い表したかったこと（言い表したくてもどういう表現をすればよいかわからなかったこと）にぴったり合った素材を提供できているかが鍵となるだろう。

VIII. 今後の課題

今後の本コース、教材の課題について触れておく。

1. 中国語母語話者に見られる作文の特徴に対する指導

文章を推敲する一般的なポイントについては「ステップ4」にまとめた、中国語母語話者ならではの推敲ポイントについて指導していく必要があるだろう。特徴的なポイントとしていくつか挙げてみる。

①漢語の多用

中国語での文章表現力がある人ほど、漢語の多用が目立つ。中には、漢語の中に平仮名が埋もれているような文章もある。「年のせいで、記憶力の衰えが著しいので、この方面の不足を増進させるために、以下の学習の措置を採取するようにしました」、「この方法は、実践に証明して理論に概念が明確し、実際に応用時に正確率が高くし、日本語のレベルアップが少々速いだと思います」など。漢語を多用した文は、スピーチの原稿としてはそぐわない場合が多い。また、漢語が多用されすぎた文章は意味自体もわかりにくくなる場合がある。

② 故事成語の引用の仕方

中国の故事成語については、日本語の文章表現の中でも使われる場合も多いが、帰国者の利用率はそれよりも高く、日本では認知度の低い故事成語もよく利用される。例えば、「効果については、まるで『トラに翼を添えたように』覚えやすくなってきます」「私は『拙い鳥は先に飛び立つ』を目標として、できるだけ頑張りました」など、日本語に訳されていたとしても、聞き手にはその意味が伝わらない場合もあ

り、なんとなくニュアンスはわかっても表現として唐突であったりする。故事成語の多用は彼らの個性の1つとも捉えられよう。その故事成語を日本での認知度によって解説も加える等、引用の仕方を考えれば、おもしろい作文になるかも知れない。

③ 助詞の使い方

日本語の助詞は中国語母語話者には、大変難しい部分である。助詞の使い間違いも多いが、助詞自体が抜けてしまう文も多い。「一番印象残るのは一級の合格道を導いてくださった先生でした」、「両国漢字の意味全く違う」、「友達食事私おごる、一切費用私は支払います」など、中国語の文の仕組みに従い漢語をただ並べて完結している作文もよく見られる。このような場合には助詞の存在を意識することや助詞の役割、意味などに注意を払わせるのもよい復習になるだろう。

2. 帰国者が自己表現したいと思うテーマ選び

スクーリング講師からの報告で、受講者の作文が「テーマから外れる」（テーマ以外に書きたいことがある）場合があったり、「教科書のモデル作文に共感はできるが興味が湧かない」場合があるとの報告を受けた。

やはり、帰国者の特性をよく分析したテーマ選びが必須であろう。全ての帰国者が興味を持つテーマというのは難しいかもしれないが、複数のテーマを示すことにより、書きたいことと重なる部分を増やして行けたらよいと思う。

3. 教材が自己表現の素材集として機能を高めること

本コースの教材は作文の素材集としても利用価値がなければならないが、素材となるモデル作文も掲載できる量に限界がある。小テーマのモデル作文は、1つの完結した出来事や状況をモチーフとし、内容には書き手の心情などが含まれる。自己表現するということは、ある体験を語る過程で自分がどう思ったか、どう感じたかを表現することに他ならないだろう。つまり心情を表現する豊かな表現力を持つことが、自己表現することには欠かせない。もちろん、情景描写で感情を伝えられる場合

もあるが、基本的な感情や心理状態を表現する語彙リストを充実させていく必要がある。

4. 帰国者が成果を発表できる場作り

本コースで、先にも述べたように最後はスピーチ原稿ができあがるようになっていく。遠隔課程のプログラムでは、センターとして関わられるのは原稿完成までであるが、できれば、それぞれの作文の発表の機会が得られればと思う。受講者の居住地で小さな発表の機会でも得られるよう、スクーリング講師等に協力してもらうことはできないか。中には、新聞に投稿する準備を進めているというスクーリングの報告もあった。センターとしてもHP上で帰国者の作文のページを作るなど、彼らの文章が多くの人目に触れる機会を作り出せたらと思う。

IX. おわりに

本コースを開講して改めて認識したことは、中高年になって日本語学習を始めた帰国者が、強い意志と信念を持って気の遠くなるような努力を続けていることである。そして、それを生涯の目的や楽しみに変えていることに強い感動を覚えた。

本コースの受講がきっかけで文を書くことに興味を持ち、3年計画で自分史を書くことを計画中という帰国者もいるが、自分史を書き上げるには強い動機と力量、それを助ける様々な条件が必要となる。しかし、「最近、可能な時間を利用して週1回の日本語教室に通い始めました。そこで、話す訓練と短文を書く訓練をさせていただいています。…内容は全部私自身のことです。」という受講者もいるように、日常の中の小さな出来事や記憶に残る断片的な出来事を小さなコミュニティー（近隣の人との付き合いの場や日本語教室などの学習の場でもよい）で、小さな作文として書かためていくことができれば、自己表現への不全感を解消していくことができるのではないだろうか。本コース、本教材がそのような活動を支えるきっかけや素材になればよいと思う。

